居住空間デザイン研究室

Living Space Design, Art and Architecture Lab.

郡 裕美

KORI, Yumi / Professor

偶然なる拠り所 ―忍びの手法にヒントを得た、都市に隠れる集合住宅―

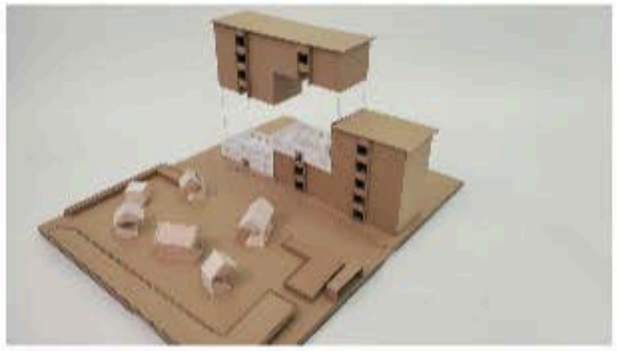
Space for unexpected encounter : Dwellings hid from city inspired by Ninja technique

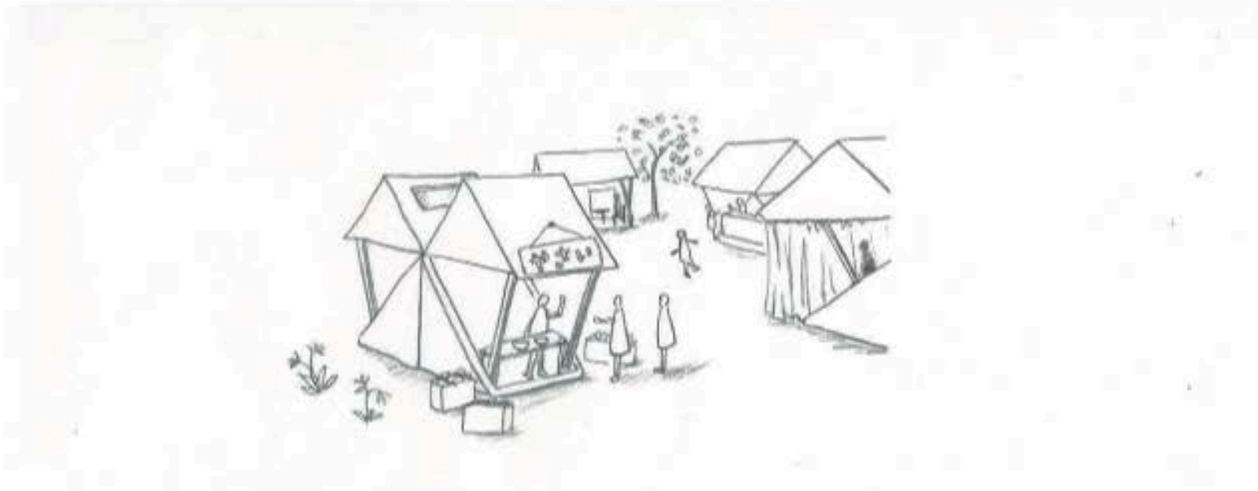
かくれんぼをしている子供、塾をさぼりたい中学生、外でリモートワークをしたいサラリーマン、親と喧嘩をして家出をした大学生など、人々には様々な理由で隠れたい気持ちが現れることがある。しかし現在の都市には隠れることができる場所がほとんどないことが問題点としてあげられる。そこで難波にある難波中公園の東側を敷地として集合住宅を設計することにより都市の隠れ家を形成する。ここでは空間内の人々や空間外から訪れる人々が様々な理由で隠れたい気持ちを持って集まる。そして空間内で混在しあい、隠れていく中で偶然にも人々が重なり合い、拠り所となる。この空間で人々の心に少しでも変化が生まれることを願う。

後山 英司
ATOYAMA, Eiji

毎日違う風景の中で ―遊牧民的多拠点居住のすすめ―

Awakening in different landscapes : Recommendation of nomadic life style in multiple bases





現在の住居は本当に"人との繋がり"ができているのだろうか。私は、土地に根付いてできている現在の住居では、そこでテリトリーができてしまい、他者が入り込めない自分だけの空間を作り出してしまっていると考えた。

そこで、住む="土地を所有する"という概念を捨てて土地を持たないモバイルハウスでの暮らし方を想像すると、定住しているだけでは生まれない新たな人との繋がりができると思った。その時の気分に合わせて自由気ままに自然豊かな畑や海、人が多く集まるオフィス街や団地など様々な場所で毎日違う時を過ごすモバイルハウスでの暮らしを提案する。

池田 海晴

IKEDA, Miharu

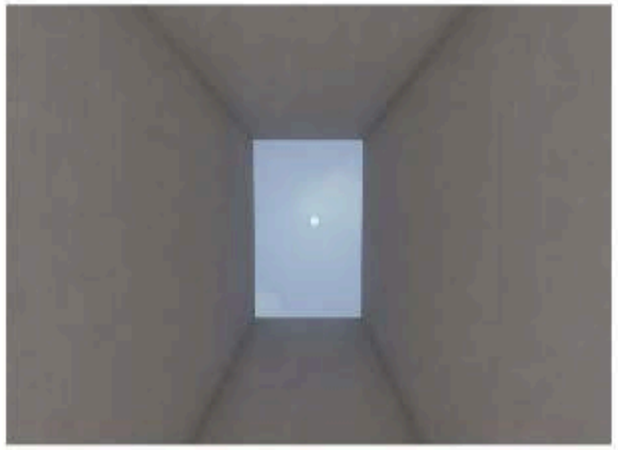
静けさに浸る ―都市に潜む瞑想空間の提案―

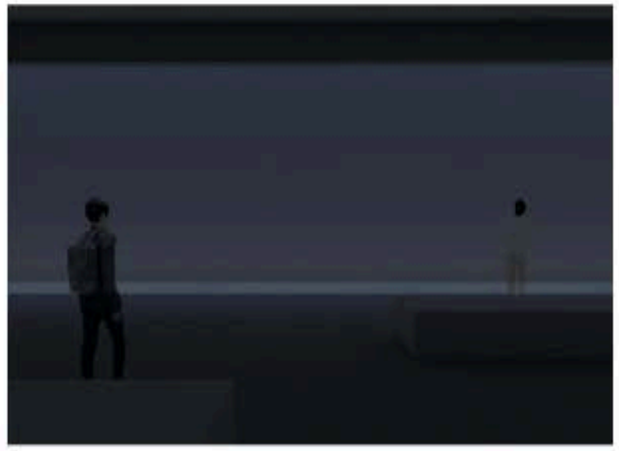
Immersing in tranquility : Meditation space in city

現代の都市に建つ建物は、壁に囲まれた圧のある高層建築物や雑多な情報量が多く、自分自身の心の整理ができる精神的空間が少ないと感じる。

そこで私は密度の高い都市空間の限られる場所に、「シークエンス・雁行」を用いて、俗世の景色から静けさのある景色へと移していく瞑想の場をデザインすることで人々の息は整えられ呼吸を意識する。

俗世との景色をハカリながら人々の気持ちがリセットされる空間の提案を目指す。





馬本 涼平
UMAMOTO, Ryohei

人間というノイズ ―集団的生存確率を意識する空間の提案―

Human = Noise : Space to be aware of collective survival probability

大阪梅田に建つ都市高層建築。ここに4年間通い都市建築が機械のように思う。

ヒトの合理性によって生まれた都市空間。ヒトのヒトによるヒトのためだけの空間。

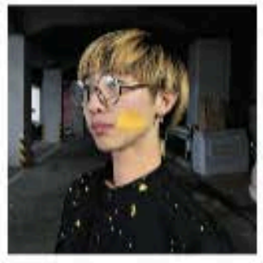
合理性を追求した均質的な箱。換気量までもが完璧に制御され、ヒト以外を寄せ付けない。本当にこれでいいのか。建築は生命である。生まれた建築は周りの生命とともに生き、成長し、衰え、朽ち死んでいく。

大阪梅田に無駄な空間を提案する。この建築には用途はない。

用途を持たないこの建築では意図できない、想像できない物語がうまれる。時間と共に生まれ、変化していく様々な使われ方。そこに訪れる生命達。そんな想像の先、新たな発見を見に行こう。

千賀 拓輔

SENGA, Takuho



出会いを育む ―託児所とカフェライブラリーのある銭湯―

Cultivating encounters : Public bath with nursery and cafe library

近年、内風呂の普及などにより銭湯を利用する人が減少し、軒数も年々減少傾向にある。

銭湯はお風呂に入るという機能だけではなく、コミュニティの場、出会いの場としての機能も自然と出来上がっていた。銭湯は唯一裸の付き合いができる場であり、自然と距離感が縮まる場だと思っている。人との関りがあまりない都会に銭湯を設計し、出会いの場を提案する。

また、普段銭湯を利用しない人でも利用してもらえるように、銭湯にカフェライブラリーと託児所を併設する。

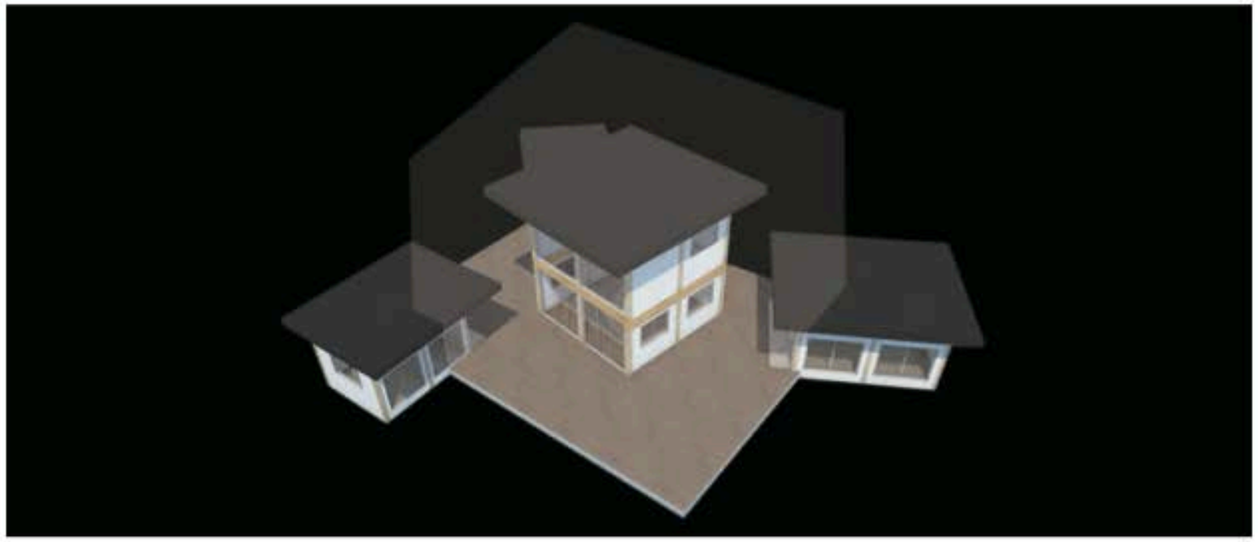
対象敷地は靭公園の北側に位置している。公園を利用する人やビジネスマン、周辺に住む人など様々な人々が集うこの場所で銭湯を利用し、たくさんの出会いを楽しんでもらいたいと思っている。

谷村 和也

TANIMURA, Kazuya

箱からの解放 ―隣人の気配を感じる住まいのかたち―

Freeing from confinement : Dwellings where people can feel neighbors



分譲地に立つ戸建住宅。マンションの一室。自分が住む茨木市にはそういった住まいが多い。これに対して１つ疑問を持った。

「住まいを、各諸室を、ここまで密集させる必要はあるのだろうか」

この疑問を持つようになってから、このような住まいを“箱”だと感じるようになった。この“箱”形は、プライバシーや動線計画、断熱性など、生活をおこなう上での利点が多い。しかしそれと同時に、人の暮らしに必要なものさえも箱の中から排除しているような気がする。そこで私は、茨木市のとある一角に、私が暮らしの中に必要だと考える「光・風・雨などの自然環境とのつながり」、「人とのつながり」の２点を念頭において、“箱”だと感じるものから解放された住まいの設計を試みた。

中川 卓也

NAKAGAWA, Takuya

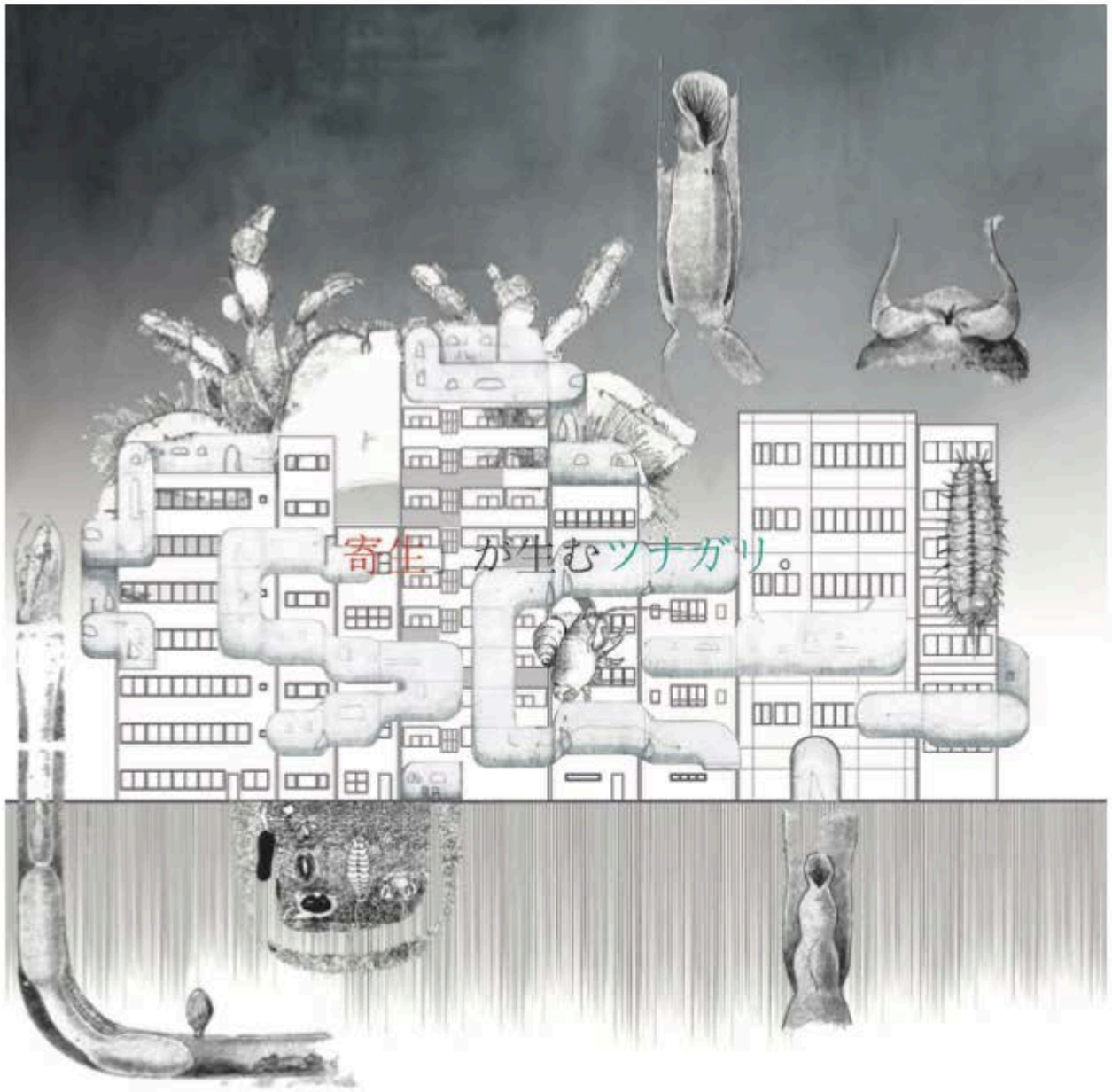
「寄生」が生むツナガリ ―多様な時代の有機的交流方法―

Relationships produced by "parasitism" : Organic exchanges in diverse societies

核家族化、個人情報保護など他人との交流がぎこちない現代社会。現存する都市のビル空間に於いても、人々のコミュニケーションの阻害を助長する作りになっているのかもしれない。

時代が急速に変化している昨今、生活の質や仕事のあり方、コミュニケーション空間の存在意義はどこへ向かうのだろう。

私は、「寄生」という生物間の関係性を建築に転用することで、有機的コミュニケーションの場、他者の生活が垣間見える空間を創り、既存ビルの将来に一石を投じる。

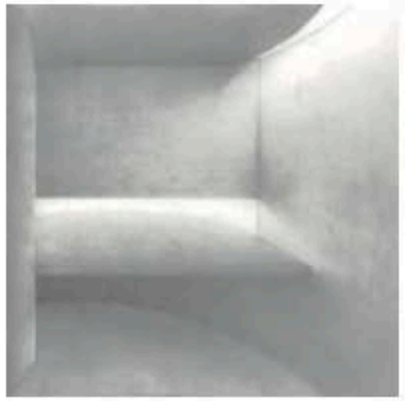


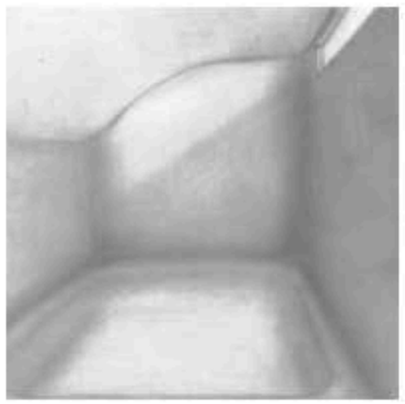
中西 惟久磨

NAKANISHI, Ikuma

光に包まれて ―暮らすように光陰を過ごす美術館―

Immersing in light space : House-like museum for appreciating light





私たち人間は時代が進むにつれて様々な発見をして
進化を続けてきた。
その一方で次第に自然の存在は薄れ
忘れ去りつつある。

ここは堺市のとある自然豊かな公園。

その中にある地図には描かれていない隠れた階段。
そこを下ると小鳥のさえずりとともに
太陽に照らされてかがやく白い建物が現れる。

ここでは様々な光の作品の中で特別な光陰-とき-を
過ごす。
人工照明で溢れた世界の中で
忘れてしまった自然光の美しさに気づき、
感じ、触れることで本来の人間の姿を思い出す。

どんな世界でも光は変わらず平等に
私たちを包んでくれていることに気づけるように。

橋本 舞
HASHIMOTO, Mai

魚と見る夢 ―泊まれる水族館―

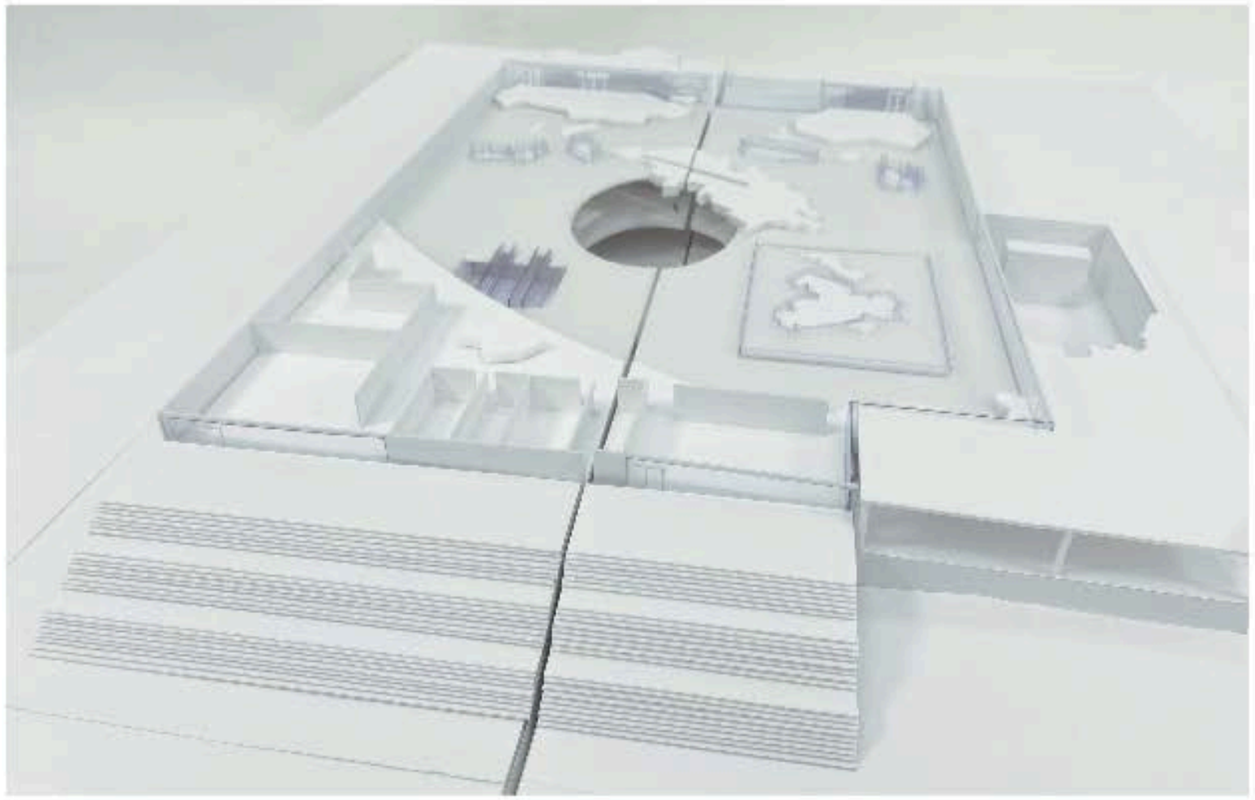
Dreaming with fish : Aquarium hotel

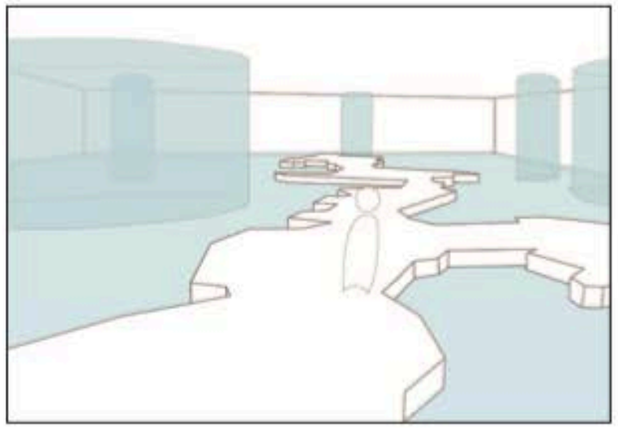
イギリスの研究チームが水族館の来場者の気分や血圧、心拍数を測定したところ、水槽の前で過ごす最初の５分で対象者の上下の血圧値や心拍数が明らかに低下し、さらに続く５分で次第に落ち着いてリラックスした気分になっていったといいます。

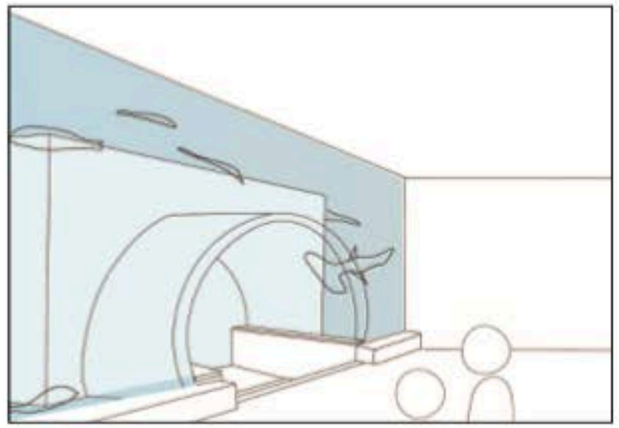
しかし、水族館では歩いて多くのスポットを周るため、癒しと同じくらいの疲れも感じるのではないかと考えました。そこで、座ったり寝転がってゆっくりできる水族館を提案します。

敷地を石川県普正寺町に設定し、石川県の島々や岸の形をモチーフにして石川県の海、日本海を表現しました。

上下左右に水槽があり、様々な角度から海の生き物たちを眺めることが出来ます。







畑田 涼那
HATADA, Suzuna